

# 後継に期待 若手研究者

ゴビ砂漠南東部シャルツアのベースキャンプから南へ約1km。調査隊が今夏の「メインターゲット」に据えた、ボーンベッド（骨化石の密集層）を発掘していた隊員の手が止まった。大型植物食恐竜「竜脚類」の長い首にまどわりつくり、肉食恐竜の歯が10個以上も出てきたのだ。しかも大きさ、形状がさまざまある。

「大きい歯はアレクトロサウルス。小型のはドロマエオサウルス類かな」。岡山理科大生物地球学部講師の林昭次さん(36)が興奮気味に話す。骨化石の内部組織を解析する「ボーン・ヒストロジー」の国内第一人者で今春同大に赴任、調査隊は初参加だ。

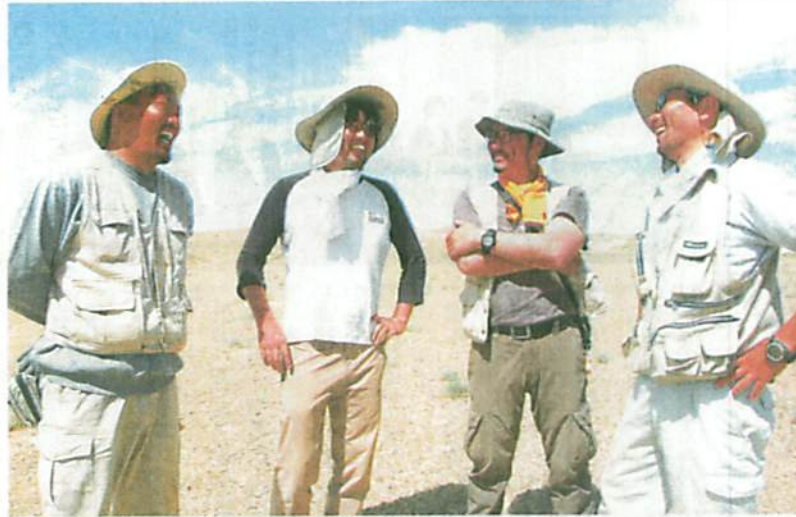
「複数種の肉食恐竜が、同じ『獲物』を食べていたかもしれない」という林さんの考察に待ったを掛けたのは、同学部講師の実吉玄貴さん(41)。地層チームを率いる理論派らしく「1帯は洪水が頻発していたよう、歯が流れてきた可能性は否定できないよ」と、太古の環境を根拠に指摘する。砂漠の真ただ中で議



## ゴビを行く

岡山理科大 モンゴル恐竜調査

④ 次代



若手研究者の(左から)メインバヤルさん、林さん、チンゾリッグさん、実吉さん。日蒙共同調査の未来を担う同志だ

論も熱を帯びた。

**先人の「血筋」**

25年目を迎えた日蒙共同調査は初期メンバーが還暦前後になり、両国の恐竜学を担う人材育成も大きな目標だ。モンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所(34)。注目を集めた世界最



地下からくみ上げた水で頭を洗う学生。砂漠での生活は何もかもが初体験だった

(IPG)には、先人の「血筋」を引く期待の若手研究員がいる。

日本側隊長の石垣忍同学部教授(62)が足跡化石研究の「後継者」と期待するのを担うノウハウを直伝したメインバヤルさん(58)の長男、チンゾリッグさん(35)は、留学中の北海道大学院から帰省して参加。陽気なメインバヤルさんとは対照的な学者タイプで、共同調査隊が数年前に掘り出した脚化石が新種のオルニトミムス類と突き止めるなど、鑑識眼に定評がある。「恐竜研究は論文化まで時間が必要。父らがそ

## 学生も貴重な経験

うしてくれたように、僕らにも次世代へバトンをつなぐ役割がある」

**過酷だけど新鮮**

今夏の調査で理科大は、これまで数人規模だった学生の参加を大幅に増やし、12人をゴビに派遣。未来の研究者たちが貴重な経験を積んだ。

飲料水や電力も限られ、洗濯は手洗い、トイレは野外、スマホも使い物にならない砂漠でのテント生活を「過酷だけど新鮮。人生で一番、密度の濃い時間」と理学部4年の村木秀直さん(21)。炎天下の発掘は連日、昼休憩を挟み8、10時間続く。生物地球学部4年の小平将太さん(20)は「何気なく扱ってきた標本の裏側にある、掘り出した人の苦労や思いを知った」とかみしめた。

学生で唯一、3年連続で参加した大学院生物地球科学研究所2年の浅井瞳さん(24)は、来春から岡山県内の地質コンサルタント会社に就職する。「海外部署がなく、自分でモンゴル支店をつくりたい。実績を積んで研究者としてゴビに戻って来られたら最高ですね」。どこまでも広い大地に、壮大な夢を描いている。

(稲垣心也) 随時掲載